

「消化器超音波診断学」

千葉大学助教授 大 藤 正 雄 編著

東京慈恵会医科大学教授

亀 田 治 男

消化器病の診断における超音波検査法の進歩は目覚ましく、ここ数年の間に極めて広く普及した。本法によって、種々の疾患が迅速に、しかも的確に診断できるようになり、聴診器のように、実地医家にとって必須の診断器具となりつつある。

わが国の消化器超音波診断の分野において、その発展と普及に、千葉大学第1内科の大藤正雄助教授を中心とする研究グループの果たした役割は極めて大きい。今回、そのグループによって、「消化器超音波診断学」という書が上梓された。

最近の超音波学の進歩は電子スキャン超音波装置の開発と、消化器におけるリアルタイム超音波の応用によるところが大きい。この研究グループは、これらの問題に精力的に取り組む、肝・胆道・膵・門脈・消化管の病変の明瞭な描出に努めると共に、世界に誇りうる経皮的胆道造影の経験をもとに、各種の超音波映像下穿刺手技へと発展させていっ

た。これらの研究成果はわが国はもとより、国際的にも高く評価されている。

359頁に及ぶ本書の内容は、まず超音波診断の基礎知識と、検査の実際、必要な上腹部諸臓器の位置的関係の解説に始まり、次いで肝の解剖、びまん性肝疾患、限局性肝疾患についての超音波診断上の必須の知識が記載されている。脾・門脈系、特に門脈圧亢進症の研究と応用は、この教室の特徴の1つでもあるが、最近多くの成果を得たパルスドプラ法による門脈血流計測にも言及している。

胆道疾患については、胆石症の種種相のほか、胆嚢壁病変、悪性腫瘍、胆管閉塞病変、胆道先天異常の診断にも応用される。胆石症の診断には従来胆嚢X線造影法が、最も広く用いられてきたが、最近は超音波検査法が first choice となり、診断における主役となっている。膵疾患ばかりでなく、消化管、特に消化管

腫瘍の診断にも応用され、腎疾患や腹膜・腹膜腔・腹膜後腔の病変についても記載されている。

本書の特徴の1つは超音波映像下穿刺手技に関する記載である。この研究グループは国際的にも Chiba needle と呼ばれる経皮的胆道造影針を作製して、PTC とその応用の拡大に貢献したが、新たに超音波穿刺用探触子を開発して、経皮的胆道造影のみならず、経皮的生検、経皮的門脈造影、経皮的膵管造影に活用し、更に経皮的ドレナージなど治療面へもその応用範囲を拡げている。

本書は印刷も極めて鮮明で、各項目のデザインもよく、読者の読みやすいような配慮が行き届いている。しかも画像診断書にとって最も重要な、症例についての超音波画像と共に、直接胆道造影や手術標本の写真などが豊富に盛られており、かつ、研究成果に基づいたシェーマが随所に挿入されて所見の特徴も把握しやすい。

本書は消化器病の診療に従事する医師にとって、極めて有用であり、消化器病超音波診断に当たって、また消化器病学の勉学に際して、是非熟読されることをおすすめする。

B5判 372頁 図96 写真690 1985

¥ 13,000 ㊦ 400

医学書院 刊